

## ブルガリア・バンスコにおける観光発展と空間構造

飯塚 遼\*・有馬貴之\*\*・菊地俊夫\*\*・

トウジヤロフ, デイミター\*\*\*

\*日本学術振興会特別研究員 DC, 首都大学東京,

\*\*首都大学東京大学院都市環境科学研究科,

\*\*\*元首都大学東京大学院生

本稿は、ブルガリアの農村中心地の1つであるバンスコを事例に、観光産業の発展と観光空間の現況、およびその構造について明らかにするものである。ブルガリアにおいては、1989年の市場経済化や2007年のEU加盟により社会経済構造が大きく変化した。それは観光産業分野においても例外ではなく、市場経済の浸透や越境の自由化にともなって、大都市のみならず、地方都市や農村中心地においても観光を地域振興の軸とする動きがみられる。そのため、各地で観光地化が進展しており、地域間競争も激しくなっている。本稿では、建築物の外壁によって構成される地域景観を把握し、その地域景観を形成する観光関連施設の分布とともにバンスコの空間構造を捉えた。その結果、バンスコでは、スキーリゾートの空間的拡大が、国立公園と旧市街地という旧来独立していた観光空間を統合させただけでなく、伝統模倣的な景観と新たな観光空間を作り出していることが明らかになった。

キーワード：伝統模倣、観光関連施設、旧市街地、スキーリゾート、バンスコ

### I はじめに

1989年の東欧革命以降、民主主義と市場経済の導入によって、中東欧諸国における社会や経済の状況は一変した。さらに、多くの国々がEUに加盟し、変化のスピードは加速した。中東欧諸国における市場経済体制への移行やEU加盟にともなう地域変容については、日本でも多くの研究がなされている(山本, 1997; 飯嶋, 1999; 小林ほか, 2000; 山本, 2003; 小林, 2008)。それらの先行研究によれば、中東欧諸国における東欧革命とEUへの加盟は、各国に市場経済を浸透させ、ヨーロッパ内での東西間格差を是正させたとされている。ただしその一方で、中東欧領域内では東西間格差が助長され、かつ各国内での地域間格差も進行させたことが指摘されている(田中, 2001; 岡部, 2009)。以上のように、1989年以降、中東欧諸国における地域変容は学界でも大きな関心事となっ

てきた。

一方、東欧革命以降、人々の越境は自由化され、観光客の流動も大きく変化した。その様相は呉羽の一連の研究に詳しい。一連の研究では、オーストリアにドイツやオランダなどヨーロッパ各国から多くの観光客が来訪していることや(呉羽, 1997a)、都市観光とウィンターアクティビティがオーストリア観光の主要要素となっていることが明らかにされた(呉羽, 1997b; Kureha, 2004)。

このような観光客流動の変化は、観光目的地の空間構造をも変化させている。例えば、東欧の都市観光地では、宿泊施設や土産品屋が増加しただけではなく、それらの改築、改装なども行われた(呉羽, 2001; 芦川ほか, 2012)。また、その店舗構成の変化は都市観光地全体の景観の変化をもたらしている。とくに、西欧諸国の人々にとって重要な観光目的地となった都市では、西欧の資本投下で旧市街地などの歴史的景観を大きく変化さ

せ、問題視されている(岡部, 2009)。このような空間の変化の事例は都市観光地にとどまらず、例えば、クロアチアの海岸観光地ドブロヴニクの事例(岡部・中東欧都市研究会, 2009)や、旧東ドイツの海浜観光地ダンプの事例(Rulle, 2009)など、さまざまな性格の観光目的地でもみられている。

なかでも、観光客の流動の変化と観光関連産業や景観の変化(空間構造の変化)の双方が顕著にみられるのが、スキーを観光対象とした観光目的地である。中東欧諸国では、良質な雪質と物価の安さ等を理由にスキー場へ国際観光客が集中している(Kureha, 2004)。同様に、東欧諸国でもルーマニアのポイアナ・ブラショフやシナイア、ボスニア・ヘルツェゴビナのヤホリナ、そしてブルガリアの Bansko などにおいて、外国人観光客の増加とそれともなう西欧資本の投下、観光関連産業の増加、景観の変化がみられている。

とくにブルガリアの Bansko では、スキー場の入口(ゴンドラリフト乗り場)と旧市街地が共に徒歩圏内と距離的に近く、スキー場と旧市街地を一体とした観光目的地が構成されている。しかし、このようなスキー場と旧市街地が一体となった観光目的地は、これまでの研究では扱われておらず、その現状および変化の過程について検討する必要がある。そこで、本研究では Bansko におけるスキー場周辺地区から旧市街地までを対象範囲として、観光関連産業とそれらによって構成される景観の変化について調査を行った。それらのデータをもとに分析と考察を行い、スキー場周辺地区と Bansko 旧市街地にみられる空間構造の変化を明らかにすることを目的とした。

## II ブルガリアの観光発展

ブルガリアの観光が大きく進展したのは、社会主義体制下の1960年代とされている(Harrison, 1993)。1960年代初頭に黒海沿岸地域の観光開発

が始まり、ヴァルナ周辺のゴールデン・サンズやアルベナ、ブルガス周辺のサニー・ビーチにリゾート施設が建設された。1960年代後半には、リラ山脈のボロヴェッツをはじめとして、ヴィトウーシャやパムポロヴォ、 Bansko にスキーリゾート<sup>1)</sup>が建設された。また、全国各地に点在する温泉も観光資源として活用し、内陸部の観光開発が行われた。これらの観光開発は、政府による外貨獲得を目的としたものであり、主として他の社会主義国、特にソビエト連邦圏からの観光客を誘致するものであった。

ところが、1989年にブルガリアが市場経済化すると、社会主義国からの支持基盤を失った国内の観光産業は大きく低迷した。そこで、政府は西欧諸国の外国人観光客を誘致する観光政策を進めた(Bachvarov, 1997; Hall, 1998)。これまで社会主義体制の休暇制度に依存していたブルガリアの観光業は、施設の老朽化やプロモーション不足、産業従事者の教育不足などの課題からすぐには脱却できなかったものの、1990年代を通じて徐々に市場経済への適応が進行していった。

図1は、1980年から2008年間のブルガリアに

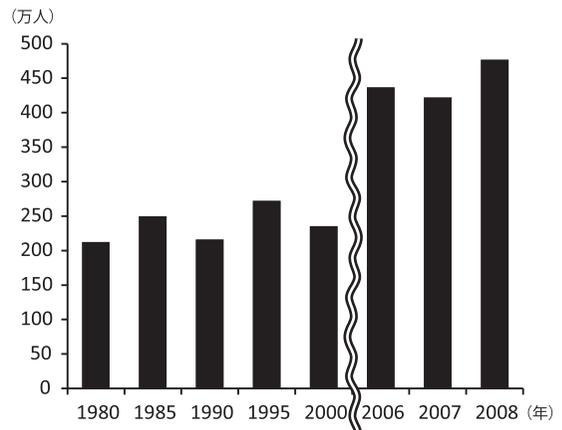


図1 ブルガリアにおける外国人観光客数の推移 (National Statistical Institute of Bulgaria 統計データより作成)

おける外国人観光客数の変遷である。これによると、1980年代から1990年代にかけては低位安定の傾向を示していたものの、2000年以降急速に観光客数が増加している。とりわけ2000年と2006年の観光客数を比較すると、およそ2倍の違いがある。この外国人観光客数の増加は、政府の観光政策やプロモーションが功を奏したものであった(National Statistical Institute, 2008)。実際、民主化後の政府は従来のリゾート施設だけではなく、地方の伝統文化や産業、歴史、文化なども積極的にプロモーションしていた。さらに、2007年にブルガリアがEUに加盟すると、観光客数はさらに増加した。2008年時点で、ブルガリアの年間外国人観光客数は約477万人であり、それは国内の観光客数も含めた年間観光客数全体の50%以上を占めていた。

総じて、社会主義体制下のブルガリアでは、観光資源の分布が海岸リゾートの黒海沿岸と温泉保養地やスキーリゾートの内陸部といった、ある一定の地域に偏在していた。その当時は、他の社会

主義国からの観光客を主とし、彼らが夏季に黒海沿岸のリゾートや温泉を訪れるという観光形態を中心としていた。ところが、1989年の市場経済化にともない、政府は西欧諸国の観光客誘致を目指した整備を始め、その約10年後の2000年以降、観光客数が大幅に増加した。近年では、海岸リゾートや温泉保養地だけではなく、遺跡や旧市街地といった文化的建造物や景観が観光資源として見直され、ブルガリアの観光は多様化の時代へと変化している。

### Ⅲ バンスコの観光発展

#### 1. バンスコの概要

バンスコはブルガリアの南西部ブラゴエフグラード州にある人口約12,000の自治体である(図2)。ピリン山脈を水源とするグラズネ川によって形成された扇状地上に位置し、市街地は南側から北側に向かって緩やかに高度を下げている。バンスコの南西部はピリン国立公園となっており、その豊かな自然環境は夏季の重要な観光資源として

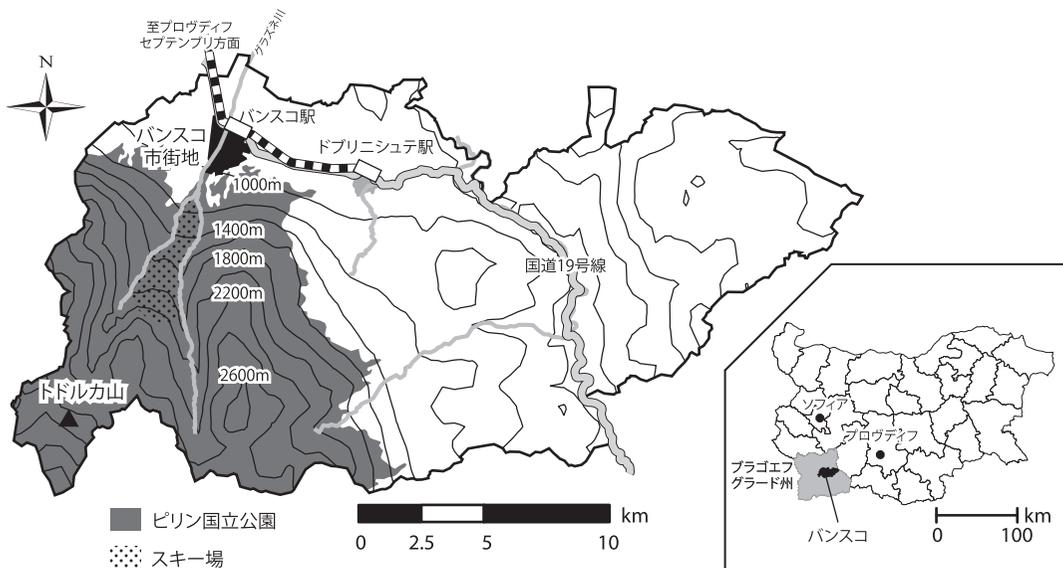


図2 研究対象地域

親しまれている。

バンスコの役場資料および外山(2009)によると、バンスコの伝統的な主要産業は、牧羊業とタバコ作を中心とする農業であった。また、エーゲ海沿岸地域とドナウ川沿岸地域を結ぶ交易路の中継点であったため、古くから商業が栄え、18世紀ごろにはその最盛期を迎えた。しかし、近年では牧羊業、農業、商業共に衰退しており、成長の著しい観光関連産業が地域の中心産業へと移行しつつある。18世紀当時の商家や農家の建築物は、旧市街地を構成する要素として現在も残されており、一部は観光関連施設や観光資源として利用されている。また、ピリン山脈の一部であるトドルカ山には、大規模なスキー場が立地しており、ブルガリアのみならず、ヨーロッパ各国の観光客が訪れる冬季のリゾート地となっている。

## 2. バンスコの観光発展

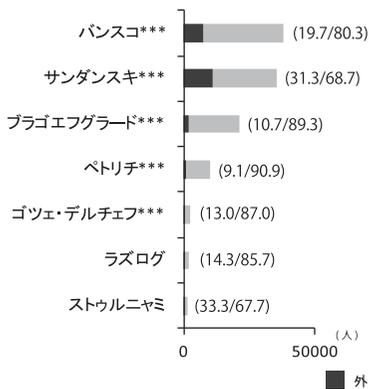
バンスコの観光地化は、社会主義体制下の1960年代ごろに始まった。その発端はヴィーレン国立公園の指定であった。ヴィーレン国立公園は、森林保護を目的として1962年に設立され、1974年には指定地域を拡大してピリン国民公園<sup>2)</sup>となった。また、1979年にはバンスコが国際的な自然ツーリズムの拠点として政府の指定を受け、ピリン国民公園の管理事務所が設置された。1983年にはユネスコの世界自然遺産の指定を受け、名称もピリン国立公園に改称された。この時期のバンスコには、歴史的な建築物が残存する旧市街地のほかにピリン国立公園以外の目立った観光資源はなかった。そのため、1960年代から1980年代前半のバンスコでは、旧市街地での文化観光と国立公園でのトレッキングやハイキングといった自然観光が中心であり、主に国内観光客や社会主義体制であった東欧圏からの観光客が訪れていた(Harrison, 1993)。

1980年代後半からは、観光目的地としての特徴が変化した。その契機は、1985年のバンスコ・スキー場の建設であった。しかし、総延長8kmの4コースに4本のリフトとその規模は小さかった。そのため、バンスコのスキー場は国内の他の大規模スキー場には誘客で及ばず、州内の他都市やソフィアなどの近隣地域からの観光客を主な客層としていた。そのため、東欧革命を経た1990年代においてもバンスコの観光に大きな変化はみられなかった。

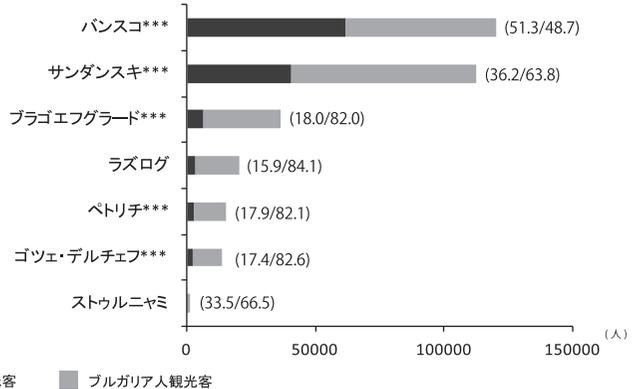
ところが、2002年になるとバンスコの観光関連企業が設立したNGOが中心となり、スキー場の拡張が行われた。その結果、2004年12月にかけて新たに総延長約70kmの15コース、8本のリフトが建設されたほか、スキーショップ<sup>3)</sup>や飲食店などの関連施設や、ホテルやペンションなどの宿泊施設が多く立地するようになった。さらに、2003年には市街地とスキー場とを結ぶゴンドラリフトが新設され、スキーリフトの輸送人員も増大した。また、近年では、アルペンスキーの国際大会が開催されたことから知名度も高まり、今日のバンスコは東欧でも有数のスキーリゾートの町として認識されるようになった。

バンスコが属するブラゴエフグラード州の2002年、および2008年の各自治体の観光客数をみると(図3)、温泉保養地であるサンダンスキと並んで、バンスコが観光客数の多い観光地であることがわかる。しかし、サンダンスキとバンスコの違いは、外国人観光客数の割合にみとれる。2002年の時点では、サンダンスキの外国人観光客数の割合は31.3%、バンスコのそれは19.7%であった。つまり、2002年はどちらの観光地においても観光客のおよそ70%から80%はブルガリア人であり、ともに国内旅行者を中心とした観光地であったといえる。ところが、2008年になると、観光客数自体が大きく増加するとともに、外国人

a) 2002年



b) 2008年



グラフ横の数値は外国人観光客の割合 (%)およびブルガリア人観光客の割合 (%)。

$\chi^2$ 検定により、年別の外国人観光客数と国内観光客数の割合に有意差がある地域名に、\*  $p < 0.05$ ; \*\*  $p < 0.01$ ; \*\*\*  $p < 0.001$ と記載した。

図3 ブラゴエフグラード州における主な自治体の国内観光客数と外国人観光客数 (2002年・2008年)  
(Regional Statistical Office-Blagoevgrad 統計データより作成)

観光客数の割合も変化した。バンスコの観光客約12万人のうち、外国人観光客は約6万人となり、その割合が全体の50%を超えるようになった。一方、サンダンスキでは外国人観光客数の割合にバンスコほどの大きな変化はみられなかった。すなわち、この6年間でサンダンスキよりもバンスコの方がよりインバウンド観光地としての性格を強めたことがわかる。

バンスコにおける宿泊施設のベッド数の推移を示した図4によれば、スキー場が拡張された2002年以降、ベッド数は年々増加し、EUに加盟した2007年には大幅に増加したことがわかる。その後もベッド数は増加傾向にあり、2009年には約14,000と、2002年時点の4倍以上となった。さらに、表1から雇用者数の変化をみると、2002年と2008年ではバンスコ全体の雇用者数が増加し、その数は約2倍となった。とくに、民間部門の雇用者数の割合の上昇が目立つ。また、失業率も2002年の6.7%から2008年の3.0%へと改善された。総じて、バンスコにおけるスキー場を核とした観

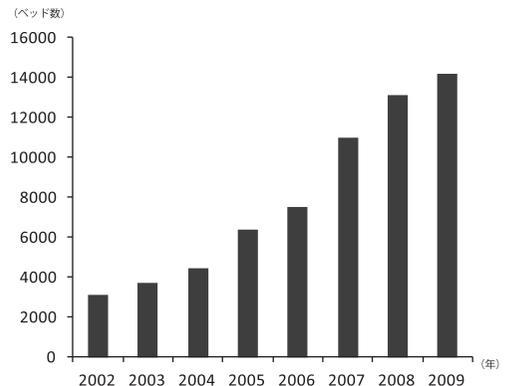


図4 バンスコにおけるベッド数の推移  
(バンスコ役場資料より作成)

表1 バンスコにおける雇用者数の変化

	2002	割合 (%)	2008	割合 (%)
公共部門	1014	36.4	709	13.7
民間部門	1769	63.6	4473	86.3
計	2783	100	5182	100

$\chi^2=552.949$ ,  $df=1$ ,  $p < 0.001$

(Regional Statistical Office - Blagoevgrad 統計データより作成)

光発展は、単なる経済的な歳入を増加させるのみならず、社会主義体制の名残から進展が遅れていた産業部門の民営化や、地域雇用の創出にも役立っていると考えられる。

#### IV バンスコにおける市街地の空間構造と観光

本章では、これまで検討してきた観光発展の諸相が、バンスコ市街地の空間構造にどのように現れているのかについて解明する。図5は、バンスコの市街地全体を示したものである。本研究では、今日の観光関連施設が集積する三つの地区、すなわち旧市街地を含むa)「中心市街地区」とb)旧市街地とスキー場を結ぶ「ピリン通り地区」、およびその南側のc)「スキーリゾート北部地区」を分析対象とした。そして、それぞれの地区における建築物の外壁様式と観光関連施設の分布を調査した。つまり、地区の景観を印象づける要素である

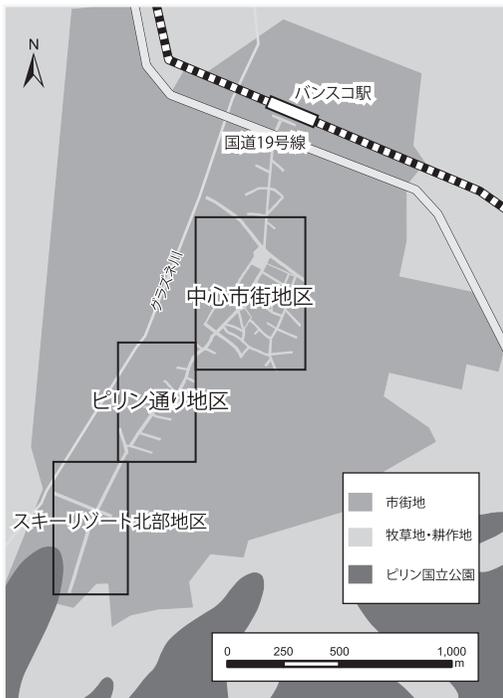


図5 バンスコ市街地 (2009)

外壁様式と観光関連施設の関係性を捉えることにより、景観にみられる空間構造の特徴を明らかにするとともに、空間構造に対する観光発展の影響についても明らかにすることを目的としている。

##### 1. 外壁様式別建築物の分布

建築物の外壁様式調査では、バンスコにおける建築物の外壁様式を5種類に分類した。外壁様式の分類は、地域伝統の石組みの隙間を土で埋めた(1)伝統型(図6-a)、石組みの隙間をコンクリートなどで埋めた(2)伝統模倣型(図6-b)、欧米で一般的なレンガ造りやブロック造りの(3)レンガ・ブロック型(図6-c)、木材で造られた(4)木壁型(図6-d)、(5)その他である。なお、景観に最も影響を与えると考えられることから、個々の建物については、目視により確認できる部分の外壁を対象とした。また、複数の外壁様式が組み合わされている場合、目視により確認できる部分の外壁における割合が最も高い様式をその建築物の外壁様式として代表させた。

図7は、バンスコにおける外壁様式別の建築物分布を示したものである。これによると、中心市街地区では、ヴァズラジュダネ広場の南東部の地区に伝統型外壁を有する建築物が集中して分布していることがわかる(図7-a)。この地区は一般に旧市街地として認識されており、18世紀から19世紀初頭の民族復興期<sup>4)</sup>に建築された商家や農家の建築物が多く残存している。この地区では、それらの建築物によって構成されるバンスコの伝統的な都市景観が維持されている。一方、ニコラ・ヴァプツァロフ広場の周辺やヴァズラジュダネ広場へと続く道筋においては、伝統型外壁の建築物は少なく、レンガ・ブロック型外壁の建築物が多くなっている。中心市街地区の北部には鉄道駅を含む新市街地があり、鉄道が開業した1940年代ごろから市街地化が進行した。そのため、新市街地



a) 伝統型外壁の例



b) 伝統模倣型外壁の例



c) レンガ・ブロック型外壁の例



d) 木壁型外壁の例

図6 建築物の外壁例

(2010年8月撮影)

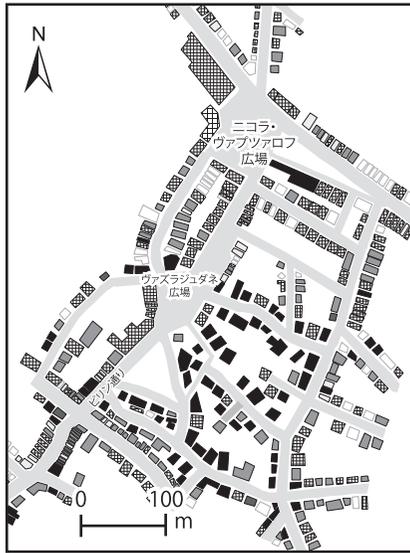
では建築年数の比較的若い建築物が多く、伝統型外壁が少ないものと考えられる。

ピリン通り地区の景観をみると、伝統型外壁の建築物は少なく、さまざまな外壁の建築物が規則性なく分布している(図7-b)。なかでも、伝統模倣型外壁の建築物と、レンガ・ブロック型外壁の建築物が多い。伝統型外壁が少ない理由は、このピリン通り地区自体の観光発展が、スキー場が規模拡大する2000年代からであり、その頃に新築されたり、更新されたりした建築物が多いためと考えられる。

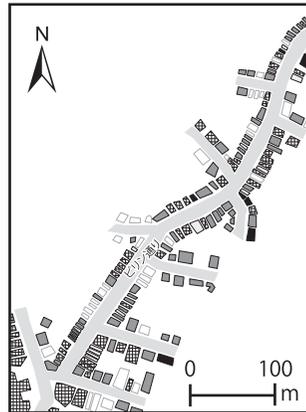
スキーリゾート北部地区においては、ナイデ

ン・ジェロフ通りより北側では外壁様式は混在しているが、南側では外壁様式がある程度の規則性をもって塊状分布していることがわかる(図7-c)。とくにゴンドラリフト乗り場からピリン通りを挟んだ東側では、木壁型外壁の建築物が、それより南側の地区では伝統模倣型外壁の建築物が集中している。このことは、ナイデン・ジェロフ通りより南側の地区が、2000年代の大規模なリゾート開発により出現した地区であり、統一された建築様式の建築物が林立しているため、地区一帯に景観の統一がみられることを示している。また、調査を行った2010年当時、分析対象範囲の南

a) 中心市街地区



b) ピリン通り地区



c) スキーリゾート北部地区

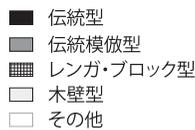
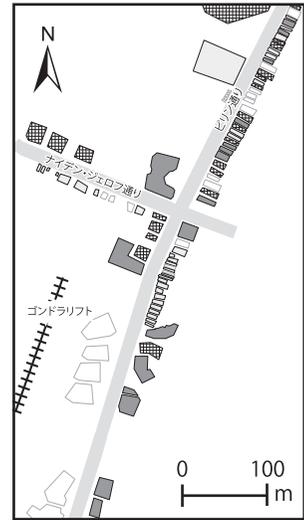


図7 バンスコにおける外壁様式別建築物の分布 (2010年)

(現地調査より作成)

側においてもリゾート開発が進行しており、伝統模倣型や木壁型の外壁様式を有する建築物が建設中であった。

## 2. 観光関連施設の分布

三つの地区におけるレストランや宿泊施設、土産品店などの観光関連施設の分布を示した図8-aによれば、中心市街地区には飲食店や宿泊施設が多く分布していることがわかる。飲食店は二つの広場やそれらを結ぶ通り<sup>5)</sup>沿いに集中している。また、飲食店はヴァズラジュダネ広場の南東方向にも分布しており、広場から離れるに従ってその数は減少する傾向にある。このことは飲食店が人々の集う広場に面して立地することで、観光客の目にも留まり、利用されやすくなるためと考えられる。また、テラス席を広場や道路に広げやすいことも影響している。

一方、宿泊施設は飲食店とは異なり、広場周辺に

はみられず、広場からある程度離れた場所に分布している(図8-a)。宿泊施設のなかでも、ホテルは旧市街地に多い。これは、中心市街地区においては、旧市街地に残存している伝統的な農家や商家の建物をホテルとして利用しているためと考えられる。なお、土産品店も人々が集う広場の周囲に分布しているものの、その数は飲食店ほどではない。また、博物館やギャラリーも広場の周囲や旧市街地に分布している。したがって、中心市街地区は、広場と旧市街地を中心とした徒歩での散策を主体とする観光空間としてみなすことができる。

ピリン通り地区では、飲食店が北東部に比較的多く分布している一方、南西部には宿泊施設が多く分布している(図8-b)。これは北東部が中心市街地区に、南西部がスキーリゾート北部地区に隣接していることが主な要因と考えられる。つまり、北東部は中心市街地区の散策をメインとした観光空間の影響を受けた施設分布であり、南西部はス

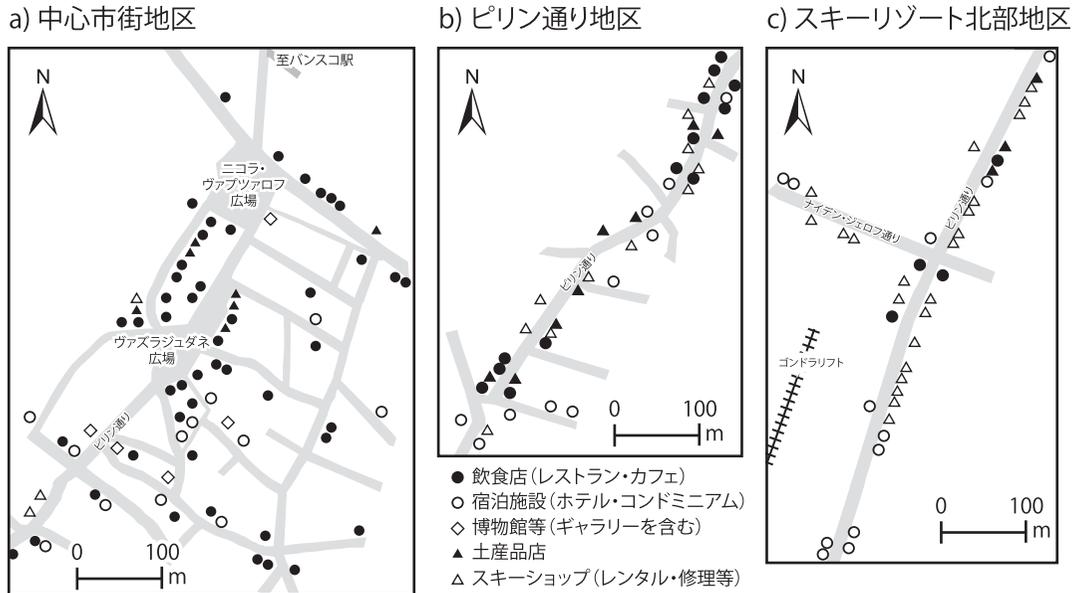


図8 バンスコにおける観光関連施設の分布 (2010年)

(現地調査より作成)

スキーリゾートの観光空間の影響を受けた施設分布である。このことから、ピリン通り地区は旧市街地とスキーリゾートを連結する空間として、またそれらの境界空間としてもみることができる。一方、ピリン通り地区のスキーショップや土産品店は通り沿いに分散して分布している。

スキーリゾート北部地区には、大型の宿泊施設が建ち並んでおり、スキーに関連する施設の分布が目立つ(図8-c, 図7-cも参照)。とくにスキーショップの多さが際立っており、それらはピリン通りの東側に集積している。また、その南側には2000年代以降に開発された大規模宿泊施設が集積している。これらの施設分布から、スキーリゾート北部地区は、スキーに関連する観光資源に大きく依存した空間であることがわかる。さらに、2010年当時、スキーリゾート北部地区の南側においても、ホテルやコンドミニウムとして利用されるとみられる建築物群が建設中であった。このよ

うに、スキーリゾート北部地区におけるスキーリゾートとしての観光空間は拡大している。

### 3. バンスコの観光発展と空間構造

本節では、これまでの調査結果を地区ごとにまとめ直し、さらにバンスコの観光発展の経緯を踏まえて、バンスコにおける観光空間の変遷について検討する。

最も古い歴史をもつ中心市街地区では、旧市街地を中心にバンスコの伝統的な外壁を有する建築物が多く残存していた(表2-a)。それらの建築物は、観光関連施設では主にホテルに利用されていた。一方、二つの広場の周辺とそれらを結ぶ通りには飲食店が集積し、これらの飲食店は伝統模倣型の外壁をもつ建築物が多く立地していた。なお、これらの飲食店の多くは「メハナ」と呼ばれるバンスコの伝統料理を提供するレストランであった。それ以外の飲食店はレンガ・ブロック型の外

表2 三つの地区における観光関連施設とその外壁様式

## a) 中心市街地区

外壁様式	飲食店	宿泊施設	博物館等	土産品店	スキーショップ	計
伝統型	12 (60.0)	5 (25.0)	3 (15.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	20
伝統模倣型	12 (75.0)	3 (18.8)	0 (0.0)	1 (6.3)	0 (0.0)	16
レンガ・ブロック型	9 (60.0)	3 (20.0)	0 (0.0)	1 (6.7)	2 (13.3)	15
木壁型	6 (66.7)	0 (0.0)	2 (22.2)	1 (11.1)	0 (0.0)	9
その他	4 (44.4)	1 (11.1)	0 (0.0)	3 (33.3)	1 (11.1)	9
計	43	12	5	6	3	69

## b) ピリン通り地区

外壁様式	飲食店	宿泊施設	博物館等	土産品店	スキーショップ	計
伝統型	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
伝統模倣型	7 (50.0)	4 (28.6)	0 (0.0)	2 (14.3)	1 (7.1)	14
レンガ・ブロック型	2 (12.5)	5 (31.3)	0 (0.0)	4 (25.0)	5 (31.3)	16
木壁型	2 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3
その他	1 (12.5)	1 (12.5)	0 (0.0)	2 (25.0)	4 (50.0)	8
計	13	10	0	8	11	42

## c) スキーリゾート北部地区

外壁様式	飲食店	宿泊施設	博物館等	土産品店	スキーショップ	計
伝統型	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0
伝統模倣型	3 (30.0)	4 (40.0)	0 (0.0)	2 (20.0)	1 (10.0)	10
レンガ・ブロック型	1 (8.3)	5 (41.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (50.0)	12
木壁型	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (9.1)	10 (91.0)	11
その他	0 (0.0)	3 (37.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (62.5)	8
計	4	12	0	3	22	41

括弧内は外壁様式に対する各観光関連施設の割合 (%)。

(現地調査より作成)

壁を持つ建築物が多く、それらは主にイタリア料理やギリシャ料理などを提供する店舗に利用されていた。つまり、旧市街地内においては、主に伝統型の外壁様式の民家や商家を利用した飲食店や宿泊施設が立地することによって、バンスコの伝統的な景観が保持されている。また、広場周辺においては、伝統模倣型の外壁様式の飲食店が多く立地することで、模倣的なものではあるものの、伝統的な景観が保たれている。

ピリン通り地区は、旧市街地とスキーリゾート北部地区の双方の影響を受けた観光関連施設によって構成された空間である。ピリン通り地区の旧市街地に近い北東部では、伝統模倣型の外壁をもつ比較的新しい建築物が多く(図7-b)、これらの建築物は旧市街地でもみられたように、飲食店として利用されていた(表2-b)。一方で、スキーリゾート北部地区に近いピリン通り南西部には、宿泊施設が集積しており、その景観はレンガ・ブロック型の外壁に代表される現代的なものであった。ただし、ピリン通り地区は、前述の中心市街地区や後述のスキーリゾート北部地区のように同一の外壁様式の集積がみられないため、景観的には統一されていないように見える。そのことは、この地区が旧市街地とスキーリゾートの間に位置

し、両者における観光空間の景観の特徴が現れた結果と考えられる。

スキーショップと宿泊施設が大半を占めるスキーリゾート北部地区には、木壁型外壁様式の建築物の塊状分布がみられた(表2-c)。とくに、ナイデン・ジェロフ通り以南でその傾向が強かった。スキーショップには木壁型外壁の建築物が多く、それらが集中して立地することで、アルプス山中のスキーリゾートのような木壁が目立つ景観を形成していた。さらに南側では新規に開発された宿泊施設が多く、それらが伝統模倣型の外壁によって新しい伝統的景観を創造していた。このように、スキーリゾート北部地区は、スキーショップと宿泊施設の建設によって構成された観光空間となっていた。

以上の3地区の空間構造についてⅢの2で述べたバンスコの観光発展の歴史と対比して考察すると、以下のようにまとめられる。バンスコの観光空間は旧来の伝統的な観光資源をもつ旧市街地と、自然観光資源をもつピリン国立公園とから構成されていた(図9-a)。1985年になると、ピリン国立公園内にスキー場が建設され、ブルガリア人を中心として観光客が訪問するようになった。その時期に旧市街地を取り囲む形で新市街地にも宿

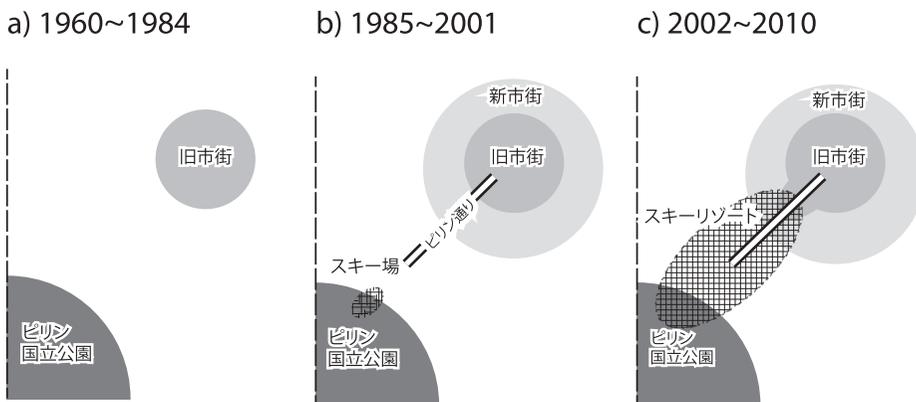


図9 バンスコにおける観光空間の変化

泊施設や飲食店などを中心とした観光空間が誕生した(図9-b)。

さらに、1989年の革命を経て1990年代には建築様式の自由化が進行し、再び伝統的な様式、すなわち伝統模倣型の外壁様式を有する建築物が建設されるようになった。2002年以降は、スキー場の大規模化が進行した。そのため、スキーリゾート北部地区をはじめとして、スキー場の入口のゴンドラリフト乗り場周辺から北東方向へ大型の宿泊施設やスキーショップが建設され、スキーリゾートとしての観光空間が拡大していった(図9-c)。

その結果、主にピリン通り地区では、スキーリゾート北部地区を中心とする観光空間と旧市街地を中心とする観光空間の連結が生じ、空間内にはレンガ・ブロック型外壁様式、伝統模倣型外壁様式、および伝統型外壁様式が混在した複雑な景観が形成された。このように、 Bansko においては、スキーリゾートの観光空間の拡大にともなって、旧市街地の観光空間が隣接して存在するようになり、その空間の連結部においては両方の性格を有する複合的な観光空間を形成するようになったことが、景観の観点から明らかになった。

## V おわりに

Banskoの観光は、ピリン国立公園と旧市街地を観光資源とする観光がその発端であった。しかし、社会主義時代においてはそれらの観光資源がいわば点として存在している状況であり、それらが結び付けられた複合的な観光空間としての性格を有するには至っていなかった。Banskoの空間構造が大きく変化し始めた契機は、2000年代の大規模なスキーリゾート開発であった。その後、スキーリゾート北部地区における観光空間が拡大し、今日ではスキー場から中心市街地まで連結された観光空間が形成されている。

中心市街地区では、旧市街地において伝統型の

外壁様式をもつ建築物の多くが、飲食店や宿泊施設として利用されており、旧市街地の景観を資源とする観光空間が展開していた。一方、旧市街地とスキーリゾート北部地区との中間に位置するピリン通り地区においては、スキーリゾート北部地区の景観と旧市街地としての景観、さらに旧市街地を模倣した景観とが混在していた。とくに、伝統的な民家や商家を模してつくられた伝統模倣型の外壁様式は、Banskoのスキーリゾートの発展とその空間の拡大によってもたらされたものであるといえる。つまり、スキーリゾートの観光空間と旧市街地の観光空間とが隣接するようになったことにより、その連結部としてのピリン通り地区においてBanskoの伝統的景観を観光資源としながらも、スキーリゾートの性格をも併せもつという複合的な観光空間が構築されていた。

このように、Banskoはスキー場と旧市街地、およびピリン国立公園といった観光空間の相互関係を歴史的に発展させてきた。そして、現在では、その性格として複合的で多季型の観光地域を形成するまでに至ったのである。つまり、Banskoは持続的な観光地としての潜在的な要素を備えており、今後そのような観光地として発展していく可能性を示しているといえる。

## 注

- 1) 本研究では、「スキー場とそれに関連する商業施設や宿泊施設を含む空間」とする。
- 2) 社会主義時代に政府が国民の福利厚生を目的として制定した公園。
- 3) 本研究では、「スキー用品の販売や修理、レンタルを行う商店」とする。
- 4) ブルガリア史におけるオスマン・トルコからの独立運動が盛んであった18世紀から19世紀にかけての期間のこと。ブルガリアは14世紀ごろから19世紀にかけてオスマン・トルコの支配下にあった。
- 5) 2つの広場を結ぶ通りはいずれも歩行者専用道であり、自動車を気にせず散策できる。

## 文 献

- 芦川 智・金子友美・高木亜紀子 (2012) : チェコ共和国における民主化と都市空間の変化－民主化20年後の東欧. 学苑, **861**, 2-14.
- 飯嶋曜子 (1999) : ヨーロッパにおける国境を越えた地方自治体間連携. 経済地理学年報, **45**, 79-99.
- 岡部明子 (2009) : ヨーロッパ全体における中東欧の戦略的位置づけ. 季刊まちづくり, **23**, 100-108.
- 岡部明子・中東欧都市研究会 (2009) : 成長する地中海観光と衰退する重工業. 季刊まちづくり, **24**, 114-120.
- 呉羽正昭 (1997a) : オーストリアにおける中欧東部地域からの宿泊客の滞在パターンとその変化. 愛媛大学法文学部論集・人文科学編, **3**, 123-139.
- 呉羽正昭 (1997b) : 中央ヨーロッパ東部地域住民の観光パターンの変化に関する一考察. 愛媛の地理, **13**, 25-33.
- 呉羽正昭 (1998) : ハンガリーにおける観光客と観光地域の変化－観光統計を用いた分析. 愛媛大学法文学部論集・人文科学編, **5**, 121-142.
- 呉羽正昭 (2000) : ヴィシェグラード諸国における観光の変化. 小林浩二・森 和紀・山本 充・呉羽正昭・佐々木 博・加賀美雅弘・中川聡史編 : 『東欧革命後の中央ヨーロッパ－旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの挑戦』二宮書店, 57-74.
- 呉羽正昭 (2001) : チェコにおける観光客流動の変化－東欧改革前後を比較して. 筑波大学人文地理学研究, **25**, 1-36.
- 小林浩二 (2008) : 東欧における大都市の変化と特色. 歴史と地理, **613**, 30-38.
- 小林浩二・森 和紀・山本 充・呉羽正昭・佐々木 博・加賀美雅弘・中川聡史編 (2000) : 『東欧革命後の中央ヨーロッパ－旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの挑戦』二宮書店.
- 田中 宏 (2001) : 東欧におけるグローバル化と地域変容. ロシア・東欧研究, **30**, 25-39.
- 外山純子 (2009) : 『ブルガリア』日経 BP 企画.
- 山本 茂 (1997) : 『今ひとたびの東欧－東ヨーロッパ地域研究』開成出版.
- 山本 充 (2003) : 市場経済化の進展に伴うプラハの都市構造の変化. 地域研究, **44**, 25-38.
- Rulle, M. (2009) : Repositioning destinations between mass market requirements and high quality offers in Germany. *Geographical Science*, **64**, 116-126.
- Bachvarov, M. (1997) : End of the model? Tourism in post-communist Bulgaria. *Tourism Management*, **18**, 43-50.
- Hall, D.R. (1998) : Tourism development and Sustainability issues in Central and South-eastern Europe. *Tourism Management*, **19**, 423-431.
- Harrison, D. (1993) : Bulgarian tourism : A state of uncertainty. *Annals of Tourism Research*, **20**, 519-534.
- Kureha, M. (2004) : Changes in outbound tourism from the Visegrad countries to Austria. *Geographical Review of Japan*, **77**, 262-275.
- National Statistical Institute. (2009) : *Tourism 2008*. National Statistical Institute Publications Division.